

## 神島の祭り

木村 都（奈良佐保女学院短大）

事例とする三重県鳥羽市神島町は、伊勢湾口に位置する面積〇・七六平方キロメートルの離島である。ここでは代表的なゲーター祭

をはじめとして、村落規模の祭りや祖靈祭祀、年中行事など、年間五〇を越える行事がいまも存続している。しかもそれらは「見せる祭り」であるより、島民の意志と信仰心に支えられた内発的な祭りであるように見える。

このような数多い祭りを支える基盤を、（一）宗教的、（二）社会的、（三）経済的、（四）政治的な位相として、宮持（夫婦）、お礼まいりの爺、隠居衆から構成される年齢階梯的な祭祀組織があり、それは神社と寺の祭りや諸行事にそれぞれ役割をもつ。宮持は島の最高齢者にして夫婦健在な者の一年交替順番制が原則であるが、最近では役務を荣誉よりも負担として辞退する例が多く、宮持決定に難航するといふ。

（二）島の人口は七〇〇人、二三三戸（平成四年八月）で、人口構成は六五歳以上二六・四%に対し、二〇歳代八・一%、三〇歳代八・四%であり、高齢化、過疎化、小家族化の進歩から免れていた

い。産業構成は、一二三二戸の四七%が漁業に従事し、その大半が専業漁家である。さらに海女従事者などを加えると、各戸なんらかの形で漁業に関わっていると思われる。しかし最近では一日四回の定期船で四〇分の本土鳥羽へ通勤する会社員（一一%）も増えた。他には民宿・旅館、日用品雑貨、仲買などの商業が一〇%で、農家はない。歴史的には大元經營による漁業の繁栄と没落、海運業の隆盛と壊滅など、島の産業構造は大きく変容してきた。現在では漁民層の高齢化と相俟って漁業規模は零細化し平準化していると考えられる。

つぎに親族組織と年齢集団の祭りへの関わりが注目される。宮持の家族（後継者）や親族、子どもと若者などが、祭りを表裏から実際に機能させている。光吉利之氏らの調査（一九八四年）によれば、神島での村内婚率は九〇%を越え、島内の濃密な親族組織と機能参与率の高さが特徴的である。神島の祭りはこの特質に支えられている。

（三）祭りに要する費用は、漁業協同組合が全面的に負担し、根付き漁獲物（貝・海藻類）の販売手数料から充当している。かつては宮持の経済力に負うところが大きく、むしろそれが誇りと名譽になっていた面もあったが、現在は宮持の負担軽減に漁協が力を注いでいる。

（四）島の行政面に深く関与しているのも、漁協もしくは組合長である。町内会長や島選出の市会議員はむしろ自治体とのパイプ役で、島内の政治的決定は漁協が行う場合が多い。組合長はほとんど祭りに参画している。

以上、祭りをとりまく諸位相を簡単に見たが、神島の共同体的な

祭りと伝統的な民間行事をいまも続いている島民の意識には、神島の風土と村落の歴史の影響を否定できないように思われる。

神島の四開は、岩礁群が点在し伊良湖岬との間の幅四キロメートルの海峡の速い海流によって、古代から海上交通の難所とされてきた。それらは一方では豊かな漁場を提供するものの、とくに冬季の波浪と季節風の烈しさは「百鯨の吼ゆるかと・・」あるいは「偏に鬼神の業」（柳田国男）と活写されるほどである。従つて冬は出漁できない日が多く、狭隘な島で風波の鎮まるのを待つ漁民の祈りは想像に難くない。島には平地部が少なくまた水も乏しかったため米作はなく、日常の食糧すら島外に頼らざるを得なかつた。

集落は島の北西斜面に密集し階段状に立地しているが、近世までは傾斜の緩い南西部にあたるとされ、大火による全村消失という不幸のため現在の地に移動したといわれる。また島の南に連なる暗礁群がかっては島であり、村落を成していたが大津波によって水没し、村民が神島に移住してきたということや、近世末の相次ぐ海上事故、とくに一八〇〇年三月の遭難では一二一人の漁民、青壯年の働き手を一挙に失い、困窮の末、渥美半島・三河地方から多数の養子を迎えたということなど、村の歴史は悲劇的な伝承に彩られている。

祭りの発現がこれらの条件だけによるものでないことは勿論であるが、神島の祭りには、儀礼様式・禁忌体系・シンボル構造が明示的で、デュルケムのいう消極的礼拝から積極的礼拝にいたる体系、また一転してエネルギーの極大、「集合的沸騰」を現出する構造をもつている。そこには祭りの原初的な形態が保持され、それはとりもなおさず島民の、つまりは漁民の祈願と報謝に発する意識と信仰心によるところが大きいように思われる。

しかし、家族構成や年齢構成、産業構造など、祭りを支える位相にはすでに変化の兆しが見られる。志摩地方の他地域では、伝統的な祭りを観光化に組み込んで新しい形の祭りや文化の創造に歩んでいるところもある。それぞれの個性と独立性が特色とされてきた志摩地方の村々が、観光地化によって画一化し地域性を喪失していくのか、伝統的な基層文化を保持し続けて行くのか、それは志摩地方に局限された問題ではなく、全体社会が進む道と軌を一にすると思われる。